説教20210321 イザヤ43：16-21　ルカによる福音書20：9-19

「新しいことは芽生え」 396　262　512

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

 「主御自身が建ててくださるのでなければ／家を建てる人の労苦はむなしい」と詩編で歌われていますが、今、私たちはこの言葉を心に刻んで、日々の生活をしていかねばなりません。今日、新型コロナウィルスの緊急事態宣言が日本全国で解除され、社会は新たな局面へと一歩を踏み出そうとしています。こういう時は、前例がないだけに様々な試みが新たになされることでしょう。またもうすでに、人々が実際に一堂に介さないでも集会や会議がパソコンの画面上で行えるシステムが広く行われています。このような新たな局面に際して、私たち人間は将来を見通すことが出来ません。こんな時には新しいサービスが次々に提案されて、人々の興味をそそり、それは人々を新天地へと運んでくれるかも知れません。しかしそのようなことも全て「主御自身が建ててくださるのでなければ／建てる人の労苦はむなしい」のです。

　そもそも新しいことを追い求めるというのは空しいことではないでしょうか。昔、「ナウい」という言葉が流行しまして、「ナウなヤングのフィーリング」などと言って、流行の最前線に乗っていることを自慢して、そうでない人をダサい、と言って卑下するという時代がありました。思い返せば、恥ずかしい時代であったように思います。

　今日のイザヤ書の19節で「見よ、新しいことを私は行う。」と主なる神は私たちに言われます。つまり新しいことを行うのは私たち人間ではなくて、主なる神ご自身であるという事です。具体例で説明すれば、この尾崎伝道師を別府不老町教会に遣わしたのは、主なる神である、という事です。皆さん、これに対し全員、アーメンと言われることでしょう。しかし、私たちはこのことを、より深く悟る必要があるように思います。遣わしたのは主なる神であり、大学でも、人のつながりでも、コネでもないという事です。そんなこと言われても、実際に大学がなければ、どういう手段で新しい伝道師を招聘するのですか、と問われるかも知れませんが、それは過去のことを思うことによって出てくる発想でありましょう。18節で「昔のことを思いめぐらすな」と主なる神が言われていますように、私たちは後ろを振返ることなく、常に前を向いて歩んでゆかねばなりません。

　前を向いて主イエスと共に歩む私たちにとって、死は、消えてなくなることではありません。今日の招きのことばで読まれましたように、主なる神は「新しい天と地を創造」されるのです。そして私たち自身も主なる神によって新しく創造されるのです。「見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして／その民を喜び楽しむものとして、創造する。」と招きの言葉は歌っています。

クリスチャンになるという事は、私たち自身も新しく創造され、いよいよその、代々とこしえの喜びに私たちも入れられるという事であります。

ここで主が用いられる新しい、という形容詞を、私たちはその通り受け止めていきましょう。それは、過去にまったくなかったこと、私たち人間が想像もできないことです。それゆえ、私たちは新しいことに遭遇するとき、希望と同時に恐れをも抱かされることでしょう。殊に死という、新しい出来事に際しては、私たちは希望よりも恐れのほうを強く感じてしまいがちです。それは、私たちが、死後に招かれる「新しい天と新しい地」の新しさを、この世的な新しさと混同して、見誤っているからかも知れません。この世においては、私たちは「新しさ」に幾度も裏切られ続けています。新しいことはこの世で颯爽と登場し、知らぬ間に退場しているのが常でしょう。例えば「新幹線」が世に登場した時には、それは世の人に計り知れない希望をもたらしたでありましょうが、今日ではその新幹線も当時の新鮮味を失っているようです。この世の新しさは、やがて古くなり、また別の新しさが追求され、それもまた古くなる、ということです。しかし主なる神が創造される「新しい天と新しい地、そして新しい私たち」というのは、そういうことではなくて、過去にまったくなかったこと、私たち人間が想像もできないことなのです。これ以上力説しても力及びませんので、是非、今日の聖書箇所を覚えて、繰り返しお読み頂ければと思います。

さて、今日の新約の聖書箇所でも「新しいこと」が語られています。それはこのブドウ園の主人が、農夫たちの元に、「私の愛する息子」を送ったという新しい出来事です。このたとえ話では、ブドウ園の主人とは主なる神の事、「私の愛する息子」とはイエス様のこと、ブドウ園とは当時の堕落したイスラエルの国の事、農夫たちはその国のリーダーである律法学者たちや祭司長たちのこと、を譬えています。農夫たちの元に、「私の愛する息子」が送られたということは、イエス様が私たちの処にやってきて、新約の時代が始まったという事です。この出来事は、まったく「新しいこと」であります。それまでは、主なる神はブドウ園の農夫の処に、僕を3回送り込んでいます。この僕とは、イスラエルの預言者たちのことを譬えています。3回というのは何度も同じように繰り返されることのたとえでありましょう。主イエスが顕れる迄、イスラエルの国には、何人もの心ある預言者が顕れ、そして迫害され不遇のうちになくなりました。名前をあげれば、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ホセア、マラキ、ハバクク、ハガイ、ヨエル、ナホム、アモスたちです。これらの預言者たちは次々に生まれては殺さたのでした。しかしイエスはまことの預言者でありますから、ただ一人だけ一回だけなのであります。そして、一回、十字架上で死なれて、そして一回、永遠によみがえられたのです。この一回という事に、神の国の新しさの真骨頂があるでしょう。

　しかし、律法学者であり祭司長であるこのブドウ園の農夫たちは、こともあろうにその息子を手にかけて殺してしまったのです。これまでやってきた僕たちは追い返していただけなのに、この息子を殺してしまった理由は、ブドウ園を自分たちの物にしたかったからです。

私たちはイエス様が話されるこのたとえ話を他人ごととして聞いては、理解できないでしょう。確かに私たちは律法学者や祭司長のように、イエス様を殺そうと、つけ狙うものではありません。が、或るものを自分たちの物にしてしまいたいという欲望から簡単に逃れられるものではありません。そういう意味で、この農夫たちは私たち自身の譬えでもあるのです。

　このたとえ話は、私たちが新しい局面を迎えた時に、何をしてしまうのかが語られているように思います。イエス様が受肉して、人となって、この地上を歩まれたとき、多くの奇跡をされ、多くの人を癒され、イエス様は有名になり、民衆たちには救世主と思われて、その時の国のリーダーたちの権力を脅かす存在になりました。

リーダーたちは新しいことを望みませんでした。イエス様にすがって、私を救ってくださいとは決して言わなかったのです。それは過去に預言者たちを次々に追い出してきたことが習い性となって、まことの預言者であるイエス様にも同じようにしたという事です。昔と同じ事をしているのです。イエス様はまことに、家を建てる者の捨てた石で、隅の親石であったのに、リーダーたちは頑なにそのことを否定しました。そんなことがあってはならないと考えました。なぜなら、イエス様に自分たちの物であるブドウ園を奪われると思ったからです。ここにこのリーダーたちの救われない大いなる誤解があります。イエス様のなされた奇跡は彼らにとっては、自分たちの偽りの国を脅かす脅威以外の何者でもなかったのでした。

翻って私たち自身のことを考えてみましょう。私たちは自分の人生を自分のものと思っていないでしょうか。そうではありません。私たち各自に与えられたこの命とは、主イエスから恵まれた命であります。このことは今のこの世にあって常識ではありません。多くの学校で、自分の人生を自分できりひらき自分で輝かせるように指導しています。私たちはそのようなこの世の風潮にリードされて、この世を歩んでいます。神なき世にあっては、ブドウ園はまったく私たちの物にならざるをえないかも知れません。

　主イエスはこのブドウ園と農夫のたとえ話を、民衆たちに話したのですが、１７節に「イエスは、彼らを見つめて言われた。」と記されています。主イエスは、民衆たちを見つめた訳ですが、この時、民衆たちは、主イエスの奇跡を信じてはいたが、主イエスご自身を信じていた訳ではないのです。主イエスは民衆たちを見つめて言われます。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』と詩編に書いてあるのはどういう意味なのかと。

　この親石がブドウ園から放り出された主イエスご自身のことであることを、民衆たちが悟ったかどうかは記されていませんが、時のリーダーたちが真に受けるには十分でした。

私たちは是非、このように主イエス様に見つめられて、この話を真に受けていきたいと願います。それは、律法学者や祭司長たちのように怒りにもえて行動するのではなく、ブドウ園の外に放り出された主イエス様を信じてついていくという事です。

新約という新たな局面にあって、私たちは新しいことを行う主イエス様と共に歩んでいくことが出来ます。しかしその具体的な日々の歩みでは「ブドウ園の外に放り出される」ような苦難を強いられることもあるでしょう。しかし、そのブドウ園の外、制度の外にこそ主イエス様がおられ、私たちを見つめておられるという事を私たちは悟って参りましょう。

　処で、先々週に実のならないいちじくの木のたとえ話をしましたが、今日のブドウ園といい、いちじくの木といい、どちらも腐敗した当時のイスラエルの国のことを譬えてイエス様は語っておられます。が、やはり、主イエス様はぶどうの木に対して好意的で、いちじくの木に対して手厳しいことが思わされます。このことは、私たち人間が一国の将来をどうこうできる者ではなく、ただ神の意志が実現するという事を示唆しているかのようです。神は愛する者を愛されるのです。私たち人間は、ぶどうの木の部分にも、いちじくの木の部分にも譬えられましょうが、そんな私たちはどこにあっても「新しいことを行われる」主なる神の御業に参与して参りたいと願います。その為に、今日も明日も今置かれています場所にて、その木に肥やしを与え続けていきたいと願います。

祈ります

主よ、あなたは私たちを常に祝福し、新しい命へと招いてくださることに感謝します。私たちはいつも十字架を見上げつつ、自らの古い殻を壊し、あなたの新しい命に生きる者となりますように。

この世にあって、多くの悲しみや苦しみがありますが、どうか主よ、そんな私たちを慰め癒してください。そして私たちを争いではなく、平和を作り出す者へと作り変えて下さい。

多くの逢えないでいる兄弟姉妹を覚えます。私たちが常に御子イエスキリストの信仰を固くして、実際には逢えないでも、祈りの内に兄弟姉妹を身近に置くことが出来ますように。

先週には、東京より早川あきや伝道師が、日出教会に来られたとの事です。この地の伝道の為に近くに来られたこの伝道師が祝福されますように。私たちが協力してこの地にあなたの福音を宣べ伝えていくことが出来ますように。

父と聖霊とともに